

「ソーシャルワーカー」という生き方

奨励	空閑 浩人〔くが・ひろと〕
奨励者紹介	同志社大学社会学部教授
研究テーマ	社会福祉実践（ソーシャルワーク）論研究

イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病氣や患いをいやされた。そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病氣や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

（マタイによる福音書 4章23―25節）

一人一人大切に

おはようございます。社会学部社会福祉学科に所属しています空閑浩人です。このチャペル・アワーでお話をさせていただけることに感謝いたします。

私が所属する社会学部の授業は、その多くが新町キャンパスで行われます。学生たちからは今出川キャンパスで授業を受けたいという声も聞きますが、私は社会学部がそして社会福祉学科が、新町キャンパスが拠点で良かったなと思っています。その理由は、新町キャンパスの臨光館と尋真館の間の渡り廊下の壁に、「諸君ヨ、一人一人大切に」という新島襄の言葉が大きく彫られているからです。学生たちだけでなく、私たち教職員も、毎朝この言葉を見上げながら、この言葉に触れながら登校します。そのことが、特に社会福祉学科が新町キャンパスにあって良かったと思う理由です。そして、まさにこの「一人一人大切に」という言葉こそ、社会福祉の学びや実践の基本であり、私がこれからお話しする「ソーシャルワーカーの生き方」を表す言葉だと思います。今日は、ソーシャルワーカーと呼ばれる人たちの「一人一人を大切に」仕事の内容や生き方の話をさせていただきます。

ソーシャルワーカーとは

まず、「ソーシャルワーカー」とはどのような人たちについてお話しします。ソーシャルワーカーとは、さまざまな社会福祉分野、たとえば児童福祉や高齢者福祉、障がい者福祉の分野などで働く対人援助専門職のことを言います。その援助活動の実践や方法を総称して「ソーシャルワーク」と言います。日本には、ソーシャルワーカーの国家資格として「社会福祉士」や「精神保健福祉士」の資格があり、社会福祉学科の学生たちの多くは、これらの資格取得を目指して学んでいます。「社会福祉」という言葉は、「社会の一員としての幸せや生活の安定」を意味します。それは、子どもであれ、高齢者であれ、障がいをもつ人であれ、誰でも、その一人ひとりを、固有名詞をもつ唯一無二のかけがえのない存在として、そこに生きて存在するという事実そのものによって尊重することを、その理論や実践の基盤とします。それは、他ならぬ固有の、具体の、一人ひとりの「私」が確かに生きているという事実を、限りなく大切にすることを言えます。言い換えれば、カタカナで表される自然的存在としての「ヒト」ではなく、あくまでも他者との関係やつながりのなかにある「社会的存在」としての漢字の「人」であることを支える思想や実践です。新島襄の「一人一人」の言葉もカタカナの「ヒト」ではなく、漢字の「人」ですよね。ソーシャルワーカーが担う社会福祉援助（ソーシャルワーク）とは、まさに「一人一人大切に」の言葉を、社会的に、すなわちソーシャルに実現することを目指す仕事であると言えます。

人生の「主人公」であるために

次に、ソーシャルワーカーの仕事の概要や特徴について話をします。ソーシャルワーカーの仕事は、一言で言えば、生活上のさまざまな困難状況を抱える人びとにかかわり、その福祉の実現、すなわち安定した生活の維持や回復のために、さまざまな福祉サービスや制度を活用しながら、その人の日々の暮らしを支える仕事です。つまり、人の生活や人生、価値観や生き方にかかわる仕事になります。そして、そのような生活や人生、価値観や生き方は、当然のことながら一人ひとり異なるものです。その意味で、ソーシャルワークの営みは、人の生活や生き方という、非常に個性性の高いところにかかわる仕事であり、そして、その人らしい生活やその人らしい生き方、つまりその人が、自分の生活や人生の「主人公」であり続けることを支える営みであると言えます。

創造的な試行錯誤の営み

このようなソーシャルワークの仕事は、必然的に、その時々でのかかわり方や支援のあり方を模索する、いわゆる試行錯誤を繰り返す営みになります。人の生活や生き方にあらかじめ決められた正しい答えというものはありません。そしてその答えは、人それぞれであり、またその時々に応じて変化するものです。したがって、人の生活や生き方にかかわるソーシャルワークの仕事に、「こうするのが正解」であるとか、「こうすればこうなる」といったような、あらかじめ決められた正しい答えはありません。だからこそ、その時々でのより良いかかわりや支援のあり方を見いだそうと、いろいろな知恵やアイデアを出しながら、積極的に創造的な試行錯誤をすることが大切になります。介護が必要な高齢者やその家族、さまざまな事情で親と一緒に暮らせない子どもたち、障がいをもつがゆえに就労や社会参加が難しい人びと、身寄りもなく地域で孤立状態にある人びとなど、さまざまな生きづらさや生活のしづらさを抱える人びとにかかわりながら、少しでもその生活が安定するための支援をと「試行錯誤」を重ねる仕事がソーシャルワークです。

悩み・戸惑いとともに

そしてソーシャルワーカーは、そのような仕事をととして、さまざまな悩みや戸惑いも体験します。何度訪問してもドアを開けてくれない一人暮らしの高齢者がいます。大人への信頼を失って心を開いてくれない子どもたちがいます。知的障がいや認知症であることによってコミュニケーションが難しい人もいます。ソーシャルワーカーの仕事は、たとえそのような状況にある人であっても、その人の安定した生活の回復や、その人らしい生き方の維持や回復を願って、「かかわり続けることから降りない」ということを使命とする仕事なのです。

考えてみれば、私たちは自分自身の生活や人生を振り返ってみても、自分の思いどおりにならないことが多くあり、これまでも多くあったことが思い出されます。逆に、「私はこれまで自分の思いどおりに生きてきた」と言い切れる人はいないのではないかと思います。自分の生活や人生でさえも先のことは分からないし、思いどおりにはならないのです。ましてや、人の生活や人生のことがそんなに簡単であるはずはないのだと思います。ソーシャルワーカーはあくまでも、人びとの生活と人生を支援する人であって、それらを自分の思いどおり管理する仕事では決してありません。だからこそ、安易に答えを決めつけることなく、試行錯誤を繰り返す過程が大切なのです。

第3者としてかかわる

また、ソーシャルワーカーは、当事者や利用者に対しては、家族、親子、夫婦、兄弟姉妹ではない立場で、すなわち「第3者」としてかかわる職業です。それは、家族でないから、親子でないから、夫婦でないから、兄弟姉妹でないから、第3者の立場だからこそ見えることがあり、できることがある。そんな可能性を見だし、実践する仕事でもあります。家族ではないけれど、その人の日々の生活や人生のことを思う「大切な第3者」としての存在なのです。

ソーシャルワーカーの専門性

それでは、このようなソーシャルワーカーの専門性、人びとの生活支援を担う職業の専門性とは何でしょうか。ソーシャルワークの仕事は、福祉サービスの利用者やその家族、また地域の人びとなどを相手にする仕事であって、また仕事の仕方としても、他の職員とのチームワークや、組織の一員としての働き、また地域の関係者や事業所といういろいろなかたちで連携することが求められます。そして、仕事をするなかでは、世の中のあり方やいろいろな福祉制度や政策に対する理不尽さや不条理さを感じることも多くあります。また、先ほどの試行錯誤の話のとおり、利用者や家族との関係でも難しいこと、悩むことが多くあります。この仕事はいろいろな意味で、自分の思いどおりにはいかないことも、もしかしたらそうしたことの方が、多くある仕事だと思います。ソーシャルワーカーに求められるのは、そのような状況でこそ、より「しなやかに」、より「柔軟に」、より「幅広く」、より「多様に」、より「臨機応変に」、そして「創造的に」仕事を進めていける、あるいは進めていこうとすることができるとことです。思考や実践のしなやかさや柔軟性、幅広く、多様性、創造性こそ、さまざまな人びととその個別の生活状況にかかわるソーシャルワークの専門性の大切な中身だと思います。

当事者や利用者に学ぶ

最後に、ソーシャルワーカーにとって大切なことは何でしょうか。私がソーシャルワーカーを志す学生たちにいつも伝えていることは、当事者や利用者「に学ぶこと」「教えてもらうこと」が何より大切だということです。いくら援助者だから、専門家だからといっても、当事者や利用者のことが何でも分かるということではありません。人は一人ひとり違います。ましてや、ソーシャルワークの仕事は、自分が経験したことのない経験をした人、している人にかかわる仕事です。たとえば、高齢者福祉分野で働くソーシャルワーカーであれば、自分自身が90年あるいは100年生きたことがあれば、その年齢にある方々の気持ちが分かるのかもしれませんが、また、自分自身が認知症になったことがあれば、認知症の高齢者の気持ちが分かるのかもしれませんが、障がい者福祉分野で働くのであれば、自分が重度の障がいもち、誰かの介助がないと食事や排泄、着替え、移動ができないという生活をしたことがあれば、当事者の気持ちが分かることもあるかもしれません。しかし、自分自身がそのような生活を経験していないので、分からないのです。90歳や100歳の方のリアリティや認知症の方のリアリティがどのようなものなのか。重度の障がいをもって暮らすということ、日常生活のすべてに誰かの介助が必要であるということがどんな体験なのか。自分が経験していないから、分からないのです。だからこそ、それがどんな現実で、どんな経験なのかを教えてくださいませんか。援助者としてその人に何ができれば、当事者や利用

者に教えてもらうことでしか見いだすことができないのです。その意味で、この仕事は当事者や利用者から学ぶということがとても大切になります。素敵なソーシャルワーカー、優れたソーシャルワーカーとはどのような人か。私は、当事者や利用者、その家族から多くを教えてもらえる人、何年経験を積んでもその姿勢をもち続けられる人だと思っています。

ソーシャルワーカーという生き方

今日はソーシャルワーカーという生き方をテーマに、ソーシャルワーカーの仕事やその根底にある考え方について話をしてきました。私たちが暮らす社会のなかで、生きることや生活することにさまざまな困難を抱える人びとがいます。ソーシャルワーカーは、そのような人びとにかかわり、寄り添うとともに、そのような人びとの生活が少しでも安定したものとなるように、制度やサービスを充実させる、地域に働きかける仕事をします。目の前にいる人びとを支えると同時に、その人を取り巻く社会環境に働きかける仕事をするのが社会福祉専門職としてのソーシャルワーカーです。それは、一人ひとりが社会的に大切にされる地域や社会のあり方を考え、実践する人たちであり、まさに新島襄の「人一人八大切ナリ」の言葉を体現する人のことです。

ソーシャルワーカーとは、その仕事をとおして、そして自らの生き方としても、その言葉を体現する人です。さまざまな場所で、そのような「生き方」をしているソーシャルワーカーがいます。私自身もまた一人の社会福祉士すなわちソーシャルワーカーとして、彼ら・彼女らと一緒に、そして同志社大学で社会福祉学を学び、将来ソーシャルワーカーとして「人一人を大切にする」実践を担っていく学生たちと一緒に、これからも共に学んでいきたいと思います。

私の話はこれで終わります。ご静聴ありがとうございました。

2013年11月13日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録